

日本史 大阪大学（前期） 1/2

(I)

奈良時代、仏教が国家の保護・統制の下で隆盛するなか、
日本の神を仏教の護法善神と考えるなど旧来の神祇信仰と
仏教との融合が進み、神社境内における神宮寺の建立や神
前読経が始まった。平安時代になると、山林修行を基礎と
する密教の導入により、密教と山岳信仰が結びついた修験
道が成立した。一方、怨霊・疫神を神前読経などで慰める
御霊会も始まった。その後、神仏習合はさらに進み、神を
仏の化身とする本地垂迹説が成立した。(200字)

(II)

当初、西国を基盤とする朝廷は諸国の国司を任命して全国
の行政を統括する一方、東国を基盤とする幕府は諸国の守
護・地頭を補任して全国の軍事・警察権を掌握していた。
承久の乱に勝利した幕府は、後鳥羽上皇らを配流するとと
もに没収した上皇方所領に新補地頭を設置し、六波羅探題
を設けて朝廷の監視や西国御家人の統括を行うなど西国
支配を強化した。また、皇位継承に介入し朝廷の政治に干
渉するなど朝廷に対する優位を確立した。(200字)

(Ⅲ)

農民の階層分化が進行するなか、天明の飢饉を機に多数の
貧農が耕作を放棄して江戸に流入した。荒廃した農村では
百姓一揆が増加し、江戸では下層民らによる打ちこわしが
激化した。寛政の改革では、幕藩体制の経済基盤である農
村の再建をめざし、飢饉に備えて村々に社倉・義倉をたて
させ大名にも困米を命じた。また農民の出稼ぎを制限する
とともに、農村出身の都市下層民に帰村を奨励する旧里帰
農令を発して農村人口の回復を図った。(200字)

(Ⅳ)

初期議会期、政府が提出した軍拡予算案に対し、「民力休
養」を掲げる民党は地租軽減を主張して反対した。日清戦
争後、政府と政党の提携により軍拡が進められるなか、第
3次伊藤博文内閣が軍拡の財源として地租増徴案を提出
すると、自由党・進歩党はこれに反対して憲政党を結成し
た。憲政党が共和演説事件をきっかけに分裂すると、第2
次山県有朋内閣は旧自由党系の憲政党と提携し、選挙法の
改正に応じる一方で地租増徴を実現した。(200字)